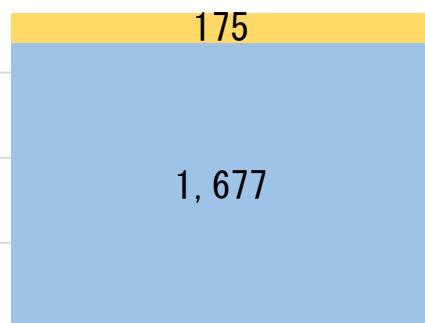


広域スペクトラム抗菌薬使用時の細菌培養実施率

◆ 90.55%



2024年度

■ 入院日以降抗菌薬処方日までの間に細菌培養同定検査が実施されなかった患者数
■ 入院日以降抗菌薬処方日までの間に細菌培養同定検査が実施された患者数
— 実施率

■ 定義

入院日以降抗菌薬処方日までの間に
細菌培養同定検査が実施された患者数
広域スペクトラムの抗菌薬が処方された退院患者数 $\times 100 =$ 広域スペクトラム抗菌薬使用時の細菌培養実施率

※広域スペクトラム抗菌薬:MEPM, IPM/CS, CFPM, TAZ/PIPC, CTLZ/TAZ, CAZ

■ 指標の解説

広域抗菌薬の多用は、常在細菌叢の攪乱や薬剤耐性菌（AMR）の発生につながります。感染症の原因微生物を突き止め、それに対応した適正な抗菌薬治療を行うことが求められている。そのためには、抗菌薬投与前の適正な検体採取による微生物検査が必須となります。

■ 改善活動

Plan

当院の現状把握。細菌培養実施率を90%以上とする。
(活動計画)

日々のAST特定抗菌薬カンファレンスで抗菌薬の適正化を協議するうえで、培養結果は狭域化の根拠となる貴重な情報である。本年度から医療の質指標となるため、先だって培養実施率を求めていく。

(下半期)

Checkでの培養実施を行っていない症例に関して、一定の傾向があることが判明した。傾向に対して各診療科へのはたらきかけを検討中。

抗菌薬投与前の培養実施の重要性について抗菌薬適正使用講演会でも紹介していく。

(年度末)

来年度も引き続きASTの中で把握するとともに、年度末、年度当初にICMで当院の状況を周知して実施率の向上を図る。

Action

Do

広域スペクトラム抗菌薬使用前の培養実施率を集計していないため、集計できるようにASTカンファレンス記録に組み込んだ。

(上半期)

2024年9月から対象薬剤について集計を行うことができている。現在、広域スペクトラム抗菌薬使用時に培養実施を行っていない症例の傾向を分析中。

(年度末)

ASTカンファレンスでは培養実施できていない症例に関して、「次回より広域スペクトラム抗菌薬使用前には培養提出を」という旨の記録を以前より実施。

Check